雜 録

林 業 語 彙 (一)

Aoki, S. Tyujyô, M. Terminology of Forestry.

(昭和四年十一月三十一日受理)

青 木 繁
中 條 道 夫

は し が き

日本の林學も追々と廣く且つ深きに進みてゐるが、その用語中には往々難解のものがあつて、普通の辭引では出て來る筈もなく、然も涉獵すべき古い多くの文獻が、各人の手元に得易くない故、吾等林學初學者は勿論、一般人にとりても誠に不便が多いであらう。編者の一人は、此の不便はいくらでも取り除けたいと、相當以前から望んでゐた。幸なことに、或日、未だ學窓にある編者の一人に「こんな仕事をやりかけてゐるが、手傳つてくれぬか」と、専門の研究を他に若干持つてゐる他の編者の一人が、彼の書齋兼客間で話しかけると、「勉強になりますから、お手傳ひさして下さい」との快諾、その結果が、即ち貧しきながらも、蒐集されつゝある本篇となつたのである。

唯、かゝる仕事の性質の當然の要求として、涉獵すべき文獻が豊富

雜 録

に座右に置かれてあるべきであるが、臺灣に於ては、それは全く反對のことであるのが遺憾甚だしい。

故に、隨所に誤謬が発見せらるゝことを豫期されてゐるが、それは後日、親切なる諸家の指摘示教によつて、訂正補修されるであらう。尙林業史の方面から整理をなしつゝあるが、勿論現代語にも及ぶものである。

参考書の主たるものは、次の通りで、何人の手にも、得易き現行の参考書、教科書の類は、書名を一々こゝに列掲することの煩を避けた。勿論能ふだけ詳細に用語の出所は明にしてある。

一、大日本農政類編	農商務省編纂
一、日本農政史	文學士 矢野 友一著
一、地方凡例錄	大石猪十郎久敬著
一、日本農民史語彙(略記、オ)	農學博士 小野 武夫著
一、林政要論(略記、カ)	林學博士 川瀬善太郎著
一、帝國林制史(略記、シ)	林學士 白河 太郎著
一、樟樹論(略記、シ、ク)	同 人
一、公有林及共同林役(略記、カ、コ)	林學博士 川瀬善太郎著
一、本邦林野の入會と入會權(略記、ウ)	林學博士 植村恒三郎著
一、明治林業史要(略記、マ)	林學博士 松波 秀實著
一、古 事 記(略記、コ)	太 安麿著
一、古事記傳(略記、コ、デ)	本居 宣長著
一、古事類苑(略記、コ、ル)	神官司廳編
一、廣 文 庫(略記、モ)	文學博士 物集 高見著

一、大日本山林會報(略記、山)

二、林學會雜誌(略記、林)

三、現行林學參考書及教科書等

大日本山林會發行

林學會發行

林業史篇

(アの部)

青

木(アヲキ) (シー三七、六八、一八九)

山林沿革調書に依れば、青木とは、杉、檜松の三樹木を言ふ。(秋田藩)

林制調書に依れば青木とは杉、檜、榎、樺、姫松、松、漆、檜葉を言ふ。(仙臺藩)

青木とは杉、檜、松等を言ふ。(鶴岡藩)

縣

主(アガタヌシ)

上代に於ける地方の行政に任ずる豪族にして、史に神武天皇大和を平定し給ひ、珍彦(うづひこ)を猛田(たけた)の縣主となし弟磯城(しき)を以て磯城の縣主となし給へり、とあり。(日本農政史)

上

山(アガリヤマ) (シー一五六)

福岡藩に於て、人民より引上げたる山に用ひたる呼稱なり。

秋

成(アキナリ) (オー二)

秋期納入する年貢の義にして、田の年貢は、多く秋に出來たるを納むる故夏成に對して此の名あり。

明

所 林 (シー一四五)

高知藩にあり、海邊近き村方にて、樹木生茂せる山林の伐木を許可せしが、漸々に改革ありて、自由の伐木を禁じ、十種の木品(榎、榎、杉、樺、椎、榎、榎、馬目)及、官木二種(榎、榎)は回り八尺以上及松の六尺以上は官木、其以下の分は三官七民の部分とす。雜木は皆民有として、地元人民一日に

壹荷採伐を許し、其他伐木するは人民の請願を糺し、雜木は無代、良木は相當代價を以下で渡したり。

明 野 獵 (アケノレフ) (シー一五七)

福岡藩に於て、官民林を不問無鑑札にて自由に銃獵する事を云ひ、之を特許せられたるは山奉行及山目付に限りたり。而して此の明野獵をなし得るを、明野獵御免と言ふ。

明 山 (アケヤマ) (シー四八)

津輕藩にあり、官山たる御本山の中、人民の入山自由を許可したるものを明山と云ひ、然らざるを留山と稱せり。

尾張藩に於ける「明山」は、村民日用の薪炭材及建築用材の爲、禁木(榎、明榎、榎、榎、鼠子、榎)を除き他の雜木を採取するを許可したる官山なり。而して此の「明山」は巢山、留山以外のものにして、享保年間、巢山、留山の周圍を劃し、鞘山と名付け、伐木を禁止するに至り、大いに地積を減じ、寶永年間以後に於ては、遂に伐木をも禁ぜらるゝに至れり。

淺 木 七 木 (アサギシチボク) (シー一四九)

高知藩にあり、留山の中の榎、漆、弓木、柞、朴、黃檗、槐を總稱して、淺木七木と云ひ、其の伐採を禁ぜり。(沿革調書)

淺 木 山 (アサキヤマ)

徳島藩(阿波藩)にあり、採薪に供する民林にして、中には杉、榎等栽培するものあり、年々十一月を期とし、收税す(之を定請連上銀と云ふ)。此の地の伐木をなさんと欲せば、其旨林方役場へ願出、役員見聞をなし、伐木を許すものなり。民林なるに斯く自由に伐木ならざる由縁は、藩主の追山と稱し、獸類を畜へ、遊獵を妨げざるの爲なり。

淺 木 林 (アサギバヤシ) (シー二〇二)

徳島藩にあり、採薪に供する民林にして、中には杉、榎等の栽培をなすものあり、年々拾壹月を期とし、收税するものなり。

「註」此の地の伐木をなさんと欲せば、其の旨林方役場へ願出て、役員見分
けをなし、伐木を許可す。民林と雖、伐木自由ならざる由縁は、藩主の追
山と稱し獸類を畜へ遊獵するを妨げざるむが爲なり。

預 リ 林（アヅカリバヤシ）（シー二〇四）

今治藩にあり、人民をして官地に杉苗等を植付けしめ、監守培養等をなさし
め、伐採の節は八官二民の割りを以て部分するあり、或は販賣代價の幾分を、
其の報勞の爲下附するあり、又人民をして、荒蕪地へ植栽培等をなさしめ、
其の手當として、枯枝、下草等を茹取らしむるものあり。

預 リ 山（アヅカリヤマ）（シー一三八、一五五、二〇四）

萩藩にあり、國司氏の制に依れば、藩より國司氏へ預りしものにして、自由
に預り主の樹木伐採を許可したり。

又清末家の制に依れば、預り山とは、其由來、士族の斷絶家等より沒收せし
ものにして、此の種の山林は、特別の緣故ある藩士に下賜したるものなり。而
して時々下柴の刈取を許し、其賣買は之を嚴禁せり。

福岡藩に於て、「預り山」と稱するは、官山を人民に預け保護せしめ、其の代
價として、薪炭材又は副産物の自由採取を許可したるものなり。

中村藩に於て、「預り山」と稱するは、御林（官林）の中のあるものを地元村民
へ預け保護せしむるものにして、雜木及び藩用に供し難き惡木は、竹木奉行見
分けの上、預り人へ無代下附するの例なり。

中津藩に於て、「預り山」と稱するは、人民の請願に依り官地を貸付し、樹木
を植付けしむるものにして、些少の税金を徴收し（年々下刈りの收利あればな
り）而して植付より手入れに至る迄一切預り人の自由に任せ、成林に及びては預
り人の出願に應じ、吏員調査の上、低價を以て之を拂下げ、若し官の入用ある
ときは其の旨を預り人に告げて伐採する事あり。伐採年度超過、皆伐するが如
きは或は之を入札拂に付して、半金は官に收納し、他の半金は預り人に下げ渡
すものとす。その他、小預り山、又は下刈山等と稱するも、其の名を異にする

ものにして、實質に於ては大差なし。

預 ケ 山（アヅケヤマ）（シー一四四、二〇六）

高知藩にあり、家老侍分の者、日用薪料及船圖場、船煙用の爲、願に依り、
近傍の留山（官林にして一般人民の入山を嚴禁せるもの）を預からしめ、枯枝、
落葉、柴草等の採拾を許可せるものなり。

鶴岡藩に於て「預け山」と稱するは、人民の請願に依り、民地に青木（杉、檜、
松等を云ふ）の植付を許すものにして、五官五民の定約たりと雖、其の雜木に
至りては、植付主の自由となす。然れども藩需要の場合に於ては、特に之を伐
るを例とす。

佐賀藩に於て「預け山」と稱するは、官地を人民に預け、一期を貳拾ヶ年とし、
樹木を植立て、年々税金を上納せしむるものなり。

平戸藩に於て「預け山」と稱するは、宜山を士族に預け、植付保護等、悉皆自
費を以て支辨せしめ、雜木の分は隨意に伐採を免するの慣例なり。

宛 行（アテガヒ又ハアテオコナヒ）（オー七）

宛行とは、例へば、知行を宛行或は扶持を宛行等に用ふ。總べて分典の義なり。

天 の 織 田（アマノクイタ）（オー一〇）

開墾後間もなき水田に、木根類の多數存するものを云ふ。神代の頃、荒涼た
る山野叢林を開墾したるため、其の木根枝條の尙ほ田地に残りて、耕作に障害
ありしを以て、特に織田を名付けたるものなるべし。

「註」前略、其素戔鳴尊の田も亦三處あり、號けて天の織田、天の川依田（あ
まのかはよりた）、天の口鋭田（あまのくちとた）と云ふ。此れ皆磯地、雨ふ
れば即ち之を流し、旱すれば則ち之を焦す。（大日本租稅志）

步 板（アユミイタ）

歩板とは廊下等に用ふる板を言ふ。

清和天皇の御宇、歩板の大きさは八枚を以て一車運送に適可するものと定めら
れたり。（大日本農政類篇、卷十、九頁）

(イ) の 部

一分税山(イチブゼイヤマ)

津輦支藩黒石に於ける部分林の呼稱にして、人民の官山使用(自費植林)收益に對する利益分收歩合の、一官九民なるものなり。

家 掛 林(イヘガカリバヤシ) (シ一四五)

家掛林とは、高知藩に於て、一人持の民有林に對し用ひたる呼稱なり。

即山間の人民が、吾が居屋敷の幅を限り、山へ引上げ、其の高さ六拾間(假令ば屋敷幅拾間なれば、六拾間を乗じ六百坪の如し)を定規とし、樹木を栽培し、成木の上自由で伐木したるものなり。然れども文政五年改革を行ひ、冥加永立となり、其の際林の間敷を不問他に故障なき分は、總べて家掛林の名稱を付したりしが、明治元年より同二年の頃冥加永を廢し、山税立私とせり。

戸 調(イヘノミツギ)

上代に於ける調制の一種にして、戸別に布を納めしむる事なり。即一戸に就きて、賃布(さよみぬの)一丈二尺を納めしめたり。(大日本農政類編)

入 會(イリアヒ) (カ、コ二〇〇—三五四)

入會とは、一村又は數村の者が、或る區域の山林又は原野に入り會ひ、上木或は下草等の天然生産物を一定の權利(入會權)、規約(採集日、採集量等)及び義務負担(入會料納付等)の下に、採集するを云ふものにして、往時土地所有の未だ確定せざりし時代に發生せるものなり。

入會は、地方に依り、入相、入合、立會、立合、入働、入組、入稼ぎ、入逢等と稱したり。

入 會 權(イリアヒケン) (カ、コ二二〇)

入會權とは、入會地に入會をなし得る權利なり。而して入會權の行使關係には、所有村と入會村との共同行使なるあり、所有村と入會との目的物件採集の範圍に差異あるものあり、又入會村のみ採集をなす借地の如き性質のものあり、或は又入會權行使を、人数又は戸數にて限れるもの、採集日を指定せるもの、

四二

入會權行使者、採集器具、採集量等に就て制限したるものあり、更に又、入會權の目的物も、普通は薪炭用雜草木、或は肥草、秣草等なるも、地方に依りては又異なるものにして、總べて各地方の古例慣習に従ひたるものなり。

入 會 地(イリアヒチ) (カ、コ二一九)

一村又は數村の者が、入會をなす地域を、入會地と言ふ。

入會地は地方に依り、入會場、入會所、入會山(以上の呼稱に於て會に代ふるに合、相の字を以てしたるものあり)、立合山、入付場、入稼場、稼山、稼場所、立入場、請山、定受山、披山、差圖山等と稱したり。

入會地關係には、各部落の共同入會なるあり、或部落有の山野に、他部落の入會するあり、又は個人共有地に他部落の入會ふもの、或は官有地に入會をなすもの等、各地方に依り種々異なるものあり、又一部落の山野に、其部落民が入りて、産物採集をなすを、入會と稱せしもの等もあり。

入 會 料(イリアヒレウ) (カ、コ二一八)

入會料とは、入會をなす村方が、その使用收益料として提出するものにして、多くは米なり。次に金錢麥等、又特別の例として、酒類或は牛等あり。

入會料の名稱は、稼料、請山料、山手米、山手前、山手金、山手銀、山手錢、山手冥加米、山札米、山丸銀、野手米、入立米、入付米、山刀米、山刀米山刀手前、鐮錢、定山代、野手間、山手間、山手役等、地方に依りて夫々異なる。入木調役(イリギシラベヤク) (シ一四〇)

秋田藩に於ける林政上の職名にして、凡そ貳拾名任命せらる。其の給料は定りなく、取押品公賣の收入金凡十分の一を給せられ、林取立役の支配を受け、管内水陸路の運搬諸材品を巡視監査し、山守の送書引合極印を改め、無極印の材品ありたるときは、之を取押へ、支配官へ申告する事等を其職分とす。

入 作(イリサク) (オ二九三)

他村の者が自村に入り來りて耕作をなすを入作と稱し、他村より來る百姓は蔑視せられ、種々なる點に於て、割の惡しきものと見られたり。

色 高(イロダカ又は、シキダカ) (オー二七)

色高とは雑税の義にして、小物成に通ずる語なり。例へば桑、漆、楮、茶、青芋等を空地又は畑の周圍に植ゑたるを引括めて課税物となし、之を高に結び付け、村高に組入るゝを總べて色高と云ふ。

註 慶安年中、信州の檢地帳には、野手米、山手米等の小物成を高を付し、本途高内に入れ、色高と記し、定五ツ取、四ツ取も見ゆ。四木高等は其品の名目を表はし、桑高、楮高など記するもあり、亦其外の草木を野高と記す事もあり、言様は種々なり。元來色高とは、小物成高の異名の様なるものなり。(地方凡例錄)

色 代 納(イロダイナメ又は、シキダイナフ)

年貢の本物たる錢又は米の代りに雜物を以て納むるを色代納と云ふ。即ち地勢其他の事情に依り、米納又は穀納の不可能なる時、其代りとして粟、薏、糠、粟、綿、竹を以て代納せしむるを云ふ。(日本農政史)

(ウ の 部)

植 木 方(ウエキカタ)

藩の植樹役を云ふ。

「註」仁孝天皇文政七年甲申、飫肥藩植木方、野中金右衛門の多年植栽せる杉樹云々、(大日本農政類篇、卷十、十八頁)

植 立 林(ウエタテバヤシ)

植立林は、部分林即ち官地に人民の自費栽植を許可し、その收益を一定歩合を以て分收するものなり。而して其の收益分收部合は、藩に依りて夫々異なるものなり。

即ち、仙臺、秋田、庄内各藩に於ける三官七民、仙臺、山形、上山、幕領、掘田、秋元、相馬、白河、二本松、三春、福岡等の諸藩に於ける五官五民、相馬藩に於ける六官四民等の如し。

植 付 林(ウエツケバヤシ) (ウー二九)

雜 錄

藩の植栽養護に依りて成立したる官山の呼稱にして、鶴岡藩に於ける呼稱なり。而してその樹種は杉、檜、松等なり。植、付林と同様なるを、金澤藩及び鹿兒島藩に於ては御仕立林と稱す。

植 松 林(ウエマツバヤシ) (シー二二)

高鍋藩にあり、同藩の一部一山(部分林)と同一にして、部一山が杉、扁柏、花柏を植栽せしむるに對し、植松林は、唯其樹種の松樹にして、植松證文を下付せしと、植松帳に登錄せしを異とするのみなり。

植 分 林(ウエワケバヤシ)

植分林は、部分林の一種にして、即ち官地に、人民の請願に依り、自費植林を許可し、一定歩合を以て其收益の分收をなせるものなり。而して官民の收益部分の歩合は藩に依りて、夫々異なるものにして即ち、會津藩(二官八民又は三官七民)、高知藩(三官七民又は五官五民)等に於けるが如し。

植 分 山(ウエワケヤマ) (シー一九四)

植分山は、棚倉藩、福島藩等に於ける部分林にして、官地に人民の自費植栽せし樹木が、成木となりたる時、前藩に於ては五官五民後、藩に於ては四官六民の歩合を以て、其收益の分收をなすものなり。

浮 郡 目 付(ウキゴホリメツケ) (シー一二八)

岡山藩に於ける林政上の職名にして、一名任命せらる。大組にして、四、五十俵より百石迄にして、一時加茂山官林を擔當せしと云ふ。

浮 役(ウキヤク) (オー三二)

浮役とは、其の税源の浮動して定り無きを云ふ。即ちその課税物件の、時に依り或は起り或は没するものに課せらるべき不定期税の謂にして、藩の財政上より云へば、他の本物成、小物に比し、一層輕き地位にあり。之に反し、定役は毎年所定の額を必ず納めざるべからざるものにして、一國一藩の財政上より云へば、前者に比し、遙に重要な位置を占むるものなり。

諸 作(ウケサク) (ウー一六)

請作とは「乞請耕作」の義にして、作人が地主に「申請け」、地主より特定の土地の宛行（あてがひ）を受け、耕作する方法なり。蓋し、地主の作人に對する恩惠的行爲なり。

請 持 山（ウケモチヤマ）（ウー四七）

之は藩山を村落に下渡し、其所有となしたる山林なり。

請 山（ウケヤマ）（ウー三六）

廣島、郡山、高取藩に於て用ひたる承役官林に對する呼稱にして、年々運上銀を徴するか、又は相當價額を一時に徴集し、十年乃至二十年間立木の伐採、肥草等を自由に採取せしむ。

「註」請山と同様なるものに、福山藩の年季請山、或は永請山等あり。又入會地を請山と稱する地方あり。

受 山（ウケヤマ）（シー一九八、二〇二）

郡山及高取藩に於て、「受山」と稱するは、領主の持山なりと唱ふる山地を、領民に貸與し、税米を以て、自費を以て苗木を挿植し、松、櫟等を除くその他、自由に伐採せしむるものなり。又樹種の如何を不問、回り五寸以上のものは、損木と雖、之れが伐採を禁じ、以下は自由に伐採を許すの慣例もあり。

福山藩に於ける「受山」には二種あり。即ち永受山及年季受山にして、永受山は年々若干の冥加銀を徴集し、肥草、薪炭芟伐等、人民の自由に任じ、又年季受山は相當の價額を一時に徴收し、拾ヶ年乃至貳拾ヶ年間、立木伐採、肥草刈取の自由を與ふるものなり。

氏（ウヂ）

上古に於ける日本國民の社會組織の根本をなせるものは氏族制度なり。氏は元來祖先を同じくしたる血族團體を表示したる名稱にして、同宗一家と云ふ意味なり。氏には大氏及び小氏あり、各々上に氏上を戴き、私有の人民たる部曲の民（ともべのみ）を有し、或は朝廷の官職若くは長官に、或は地方の長官と

なり、其子孫は之を世襲し、其職名或は地名を、氏の固有名とせり。

内 野（ウチノ）（ウー六）

入會地の一種にして、一村落到專屬し、其村落の住民のみ使用收益をなすものなり。之は又、内山とも稱するも、後年、二本松藩に於て内山と稱したるものとは、其の義を異にす。

氏 上（ウヂノカミ）

氏は諸の大氏或は小氏を統理する頭にして、其職掌は實に重大なるものなり。即ち同族を率ゐて朝廷に奉仕し、或は祖先の祭祈、氏人の叙爵、其他普通行政に關する一切の事務を統理したるものなり。然して天皇の命令は、諸の氏の代表者たる氏上を経由したるを以て、氏上は唯に其氏人の争を斷ずるのみならず必要ある時には、其家部（やかへ）を以て軍隊を編成せり。同時に氏上は甚だしく重んぜられ、後には之を氏長者と云ひ、其稱號は、特に宣旨によりて賜はるに至れり。

「註」天智天皇三年二月、大氏の氏上には大刀、小氏の氏上には小刀を伴造（とものみやつこ）等の氏上には、楯弓、矢を賜たり。天武天皇十年九月、詔して氏上の未だ定まらざるは、速に治めて上奏すべきを以てせり。

内 林（ウチバヤシ）（シー一九一）

會津藩に於ける計松林を、内林と稱する事あり。藩用の木材或は飾松（正月の門松）等を伐採する林なり。

「註」計松林の項參照。

氏 人（ウヂヒト）

諸の氏に屬する人を氏人と云ふ。各々其氏の職業に従事したるものなり。

内 見 繼（ウチミツギ）（シー四〇）

秋田藩に於ける林政上の職名にして、凡貳百名任命せらる。給料は各村に於て適宜に之を支給し、官林地元村に於て之を設け、官林は勿論民林共、濫盜伐

或は野火々災等あるときは、之を村吏に告げ、豫防及防禦等の事を司る。

内 山(ウチヤマ) (カー二五八)

二本松藩に於ける要害林たると同時に、水源林たる處の一種の保護林なり。

「註」入會地の一種に内山(又は内野)と稱するあり。内野の項参照。

内山廻り役(ウチヤマメグリリヤク) (シー一四八)

高知藩に於ける林政上の職名にして、拾參人任命せらる。奉行の命を受け、賣山と稱する官林の内、各自一部の山番所に出張し、監守をなすものなり。

賣 分 山(ウリワケヤマ) (カー二六三)

仙臺にあり、其の性質並に成立詳ならず、或は云ふ伊達綱宗の時代、封内沿海の地に製鹽製鐵の業を起し、其の燃料に供する薪材は、最初藩林より給せしも、業漸く盛なると共に、藩林のみにては不足を告ぐるに至り、藩人民に勸誘し、運材に便宜なる沿岸地方の民林を獻上せしめ、之を藩有林となし、事業終了の後、藩の見込又は獻上者の願に依りて、三ヶ二分收法(一官二民)を以て、毛上を下附するの制を設け、襲て今日に及べりと。舊藩御林帳に御鹽木山、御鐵山の名稱を附しあるは、即ち製鹽、製鐵に緣故を有する山林にして、概ね三ヶ二分收林なり。又等しく賣分山と名け、其性質の異なるものあり、即ち山林は民有なるも、盜難火災の虞ありて、自家保護の行き届かざるものは、藩に請ふて特に分收林の許可を得たるものにして、恰も秋田に於ける札山の如し。

漆仕立山(ウルシシタテヤマ) (シー五四)

津輕藩にあり、人民自費を以て官山に漆樹を植栽し、成功の後、官に於て之を検し、仕立見繼山(官地民木材)或は抱山(民林)に等しき漆山證文を下附す。「註」漆樹を千本以上植栽したる者に對しては、平民と雖帶刀を許し、郷土の格式を與へ、漆守と稱せり。而して收穫したる漆樹及漆實は、悉く之を藩廳に納めしめ、内二分を御役とし、之に對する代金を下付せざるも、殘八分に對しては、漆汁百匁に付五匁、樹實は一升銀三分の割合を以て代金を下付せり。

漆 年 貢(ウルシネンギ)

自己所有地の山際又は堤防等に漆を植ゑ置き、其の掛り物として、毎年上納する税金を云ふ。(地方風例錄)

漆 木 役(ウルシノキヤク)

漆木に課する税にして、會津藩に於ては、慶長四年、漆木役の制を定め、領内の漆木一本に對し、木實一升五合宛を年貢として收納し、その後慶長六年、漆木役一本に付き、年貢蠟二十一匁宛を上納すべき掟となり、寛永年間には、小買蠟、大買蠟及漆役上納の制加へられたり。(大日本農政類編)

運 上(ウンジャウ)

徳川時代に於ける雜税の一種にして、商業、工業、狩獵、漁業又は運送業等に從事する人民より徵集する租税なり。而して一定の率を定めて納付せしむるを運上と云ひ、定率なり、免許を得て營業するが爲に上納するものか冥加と云ふ。即ち運上は課税に屬するも、冥加は一種の獻金なり。

「註」運上には金山運上、砥石山運上等種々あり。(地方凡例錄)

運 上 方(ウンジャウガタ) (シー四〇)

秋田藩に於ける運上の賦課取立等、總べて運上に關する一切の事務を司掌するものの職名なり。

運 上 山(ウンジャウヤマ) (ウー三四)

秋田藩に於て用ひられたる承役官林に對する呼稱にして、官に於て使用料即ち運上を徴し、雜木柴草を焚伐せしむるものを云ふ。

「註」運上山と同様なるを、紀州藩に於ては定米山と呼稱す。

(エ の 部)

永 (エイ) (オー四二)

永とは永樂錢の略稱にして、徳川時代に於ては、「錢」又は「金」と同意義に用ひられたり。

永の起りは、足利氏の時代、國亂れて錢質惡しくなり、且つ通用の日本錢少

く、外國へ純金を渡して、錢を求め之を通用せしめたる程なるが、偶々、鎌倉管領足利滿兼の代にあたりて、相州三崎浦へ唐船漂着し、船中を檢するに無數の永樂錢を積めり。仍て船を停めて時の將軍義持に訴へしに、關東に着したる上は、管領滿兼の所有たるべしとの命あり、爾後此の永樂錢は、廣く關東地方に於て流通する事となり、諸年貢は勿論、民間の取引概れ此の永樂錢を用ふるに至りし故、永の語も亦隨つて流布し、永何貫何文の使用普きに至り、徳川時代に迄及びたり。

永 高(エイダカ) (オー四二)

領主に納むべき租税を、米穀の代りに金錢にて納むるに至りたる賦課額を云ふ。之は足利時代に起されたるものなるも、其の後、戦亂打續き、爲に通貨減少し、頗る不便となりしが、徳川時代に至るや、凡べて米納に改めらるゝに至れり。(地方凡例録)

永代地(エイタイチ)

永代に亘り、所有する地を云ふ。

「註」借地林業を數代約束せるも、其の長きを厭ひて、永代地に賣渡せるものあり。(北村氏著、吉野林業概要)

要害山(エウガイヤマ) (シー一二六)

岡山藩に於ける操山は、藩城に近接せる地に存したるを以て、之を要害山と稱し一切伐木を嚴禁せり。

易 田(エキデン)

大化の改新以後、田を人民に班給する際、特に瘠薄なる土地を班給する場合には、其の休閒地の代地として、餘分の田を給し、之を易田と言ひたり。蓋し、當時既に地力弱き田は、三年に一年宛、休むの習慣ありしを以て、此の休閒地の更地に充つる爲の田を、班給の最初より分配したるなり。(日本農政史)

(オの部)

御上り地山(オアガリヂヤマ) (シー二〇五)

小倉藩に於ける承設官林にして、官山を人民に預け、之を保護せしめしものにして、通常僅少の薪炭材又は副産物の採集を許可す。而て、之がため幾分の納金をなさしむるものあり或は無料なるあり。

「註」御上り地山と同様なるものに、萩、福岡、中村藩等に於ける御預ヶ山、高崎藩の百姓預ヶ林等あり。

御預ヶ山(オアツケヤマ) (ウー三六)

長州、福岡、中村、佐賀、今治、中津、平戸藩等に於て用ひたる、承役官林に對する呼稱にして、官山を人民に預け、保護せしめ、薪炭材又は副産物の自由採取を許可したるものなり。

「註」御預ヶ山と同様なるを、高崎藩に於ては百姓預り林、福岡藩に於ては又預山と稱す。

奥 御山(オクオヤマ)

(奥山の項參照)

奥 山(オクヤマ) (カー二五四)

之れには、奥御山或は里山(里御山)等の別稱あり、元來、山林の所在地に依りて名付けられたるものなれども、木更津、小倉、島原、神代領等の諸藩にありては、之を官山の名稱とせるものにして、ナ等山林總べて深山幽谷の地に存する民有に屬さざる官山なり。

「註」奥山と同様なるを、紀州藩に於ては野山と稱し、中村藩に於ては遠山と稱す。

御 園 山(オカコヒヤマ) (ウー二七)

御園山は官山にして主として、良材の繁茂せる森林を、幕府又は藩主に於て特別の需要に備へ妄りに地元人民の入山するを許さざるものなり。

御仕立林(オシタテバヤシ)

(御仕立山の項參照)

御仕立山(オシタテヤマ) (シー八四、一七六)

藩の植栽保護に依り成立したる官山にして、鹿兒島、金澤藩に於ける呼稱なり。

又、鹿兒島藩には、同じく御仕立山と稱するも、藩の委託林、即ち、藩有山の保護義務を、地元人民に負はしめ、其の代償として、林内の柴草、落枝等の採取を許すものもあり。

御仕立山は又單に、仕立山或は御仕立林とも云ふ。

御鹽木山(オシホギヤマ)

(賣分山の項参照)

御竹藪(オタケヤブ)

天然木の養護に對し、一定歩合の、收益分収を行なへる部分林にして、秋田藩(三官七民)、仙臺藩(五官五民)等にある。又、仙臺藩に於ては、之を半々賣分山と稱する事もあり。

御立山(オタテヤマ) (ウー二六)

水戸、萩、母里、久留米藩等に於て用ひたる官營林に對する呼稱にして、一般に官地の中、用材樹種の繁殖せる處を保護撫育せるものにして、林木を立てしむる意なり。又人民の植栽官納せしものを立山に編入せるものあり。中には民有の性質を有するものあり。秋田藩に於て、御立山と稱するは、承役官林、即ち藩有林の保護義務を地元人民に負はしめ、其代償として、林中の柴草、落枝等の雜産物を下附するものなり。

御注道林(オチユウシンバヤシ) (シー一九〇)

米澤藩にあり、有志者、松、杉等を植付たる地所及其立木或は官地に植付或は水源涵養、土砂扞止林等なるも、人民に於て保護をなし得ざる個所を藩廳に献上したるものなり。而して之を献上したる者に對しては其の功勞を賞し、名字帶刀或は上下の着用を許し、及び扶持米等を給與し、其の植付林の監守となす。且つ其の樹木に於ける、藩廳の需要に非ざれば伐採を許可せず。然れども地元村架橋、道路、堤防材には特典を加へ、多少の材木無代を以て下與するの

慣例なり。

「註」秋田、南部藩には之れと同様なものに忠臣植立林、同最上藩には差上林、同松村藩には寄林と稱するあり。

御忠信植立山(オチウシンウエタヤマ) (シー一八九)

盛岡藩にあり、一名忠信木とも稱し、藩廳に献納の目的を以て、官地に植樹をなしたるものを云ふ。

御直山(オヂキヤマ) (シー三七)

秋田藩に於ける官山にして、雜木と雖も、一切之れが斫伐を禁じたる處あり、又麓村にて薪炭材の供給を之より仰ぐものあり、或は麓村の中、田圃磯碕にして收穫不充分なる處の如きは、無代を以て薪炭材を下げ渡し、發賣營業を許可し、貢租の不足を補はしむるものあり。猶、青木、留木の諸木は伐採を嚴禁し、又容易に拂下げを許可せざる如き習慣あり。

「註」青木とは杉、檜、榎

留木とは槻、桂、栗、朴、栲、菩提樹等の謂なり。

御帳入給山(オチヤウイリキフザン) (シー一三九)

萩藩吉川家の采邑にある山林、士族給地にして、則無稅地なり、然れども賣木運搬等をなさんと欲する場合には、地主より下山守へ届出、賣木の荷數を定め、許可濟の鑑札を受けしむるものあり。

御帳入楮畑 (シー一三九)

萩藩吉川家の制にして、元荒山を拓き、楮畑と改めたる地なれども、樹木生立つときは、其筋へ田願の上、賣木の代償を資本とし、猶復た楮畑を開戻する法となす。

御帳入林山(オチヤウイリハヤシヤマ) (シー一三九)

萩藩吉川家の制にして、國産半紙の盛大を計らんが爲、該職人營業保護上より下渡しものにして、此の部分も又無稅地なりと雖、其賣木運搬の手續に至りては給山と異なる事なし。

御帳入緒米地 (シー一三九)

萩藩吉川家の制にして、元緒樹植込の爲、願に依りて下渡したるものにして此の部分には、地券反別もなく、只緒米何斗と定め、樹木生立つとも猥りに之れが伐採を許さず。

御鐵山(オテツヤマ)

(賣分山ノ項参照)

御手山(オテヤマ) (ウー二六)

津輕藩に於て用ひられたる、官主管の藩山の呼稱なり。即ち、其の保護看守は山麓村民に委ね、時々山方役人を派して、荒廢の跡を検せしむ。而して山麓村民の功に報ひんが爲に、官山に明山、留山の別を設け村民をして、明山に入山し、副産物、或は矮小の薪炭材等を自由に伐採するを得しめたり。

御留山(オトメヤマ) (シー一六九)

仙臺、熊本、延岡等の諸藩に於ける官山の呼稱にして、良材繁茂せる森林を、特別の用に備ふる爲め、妄りに地元人民の入山するを禁じたるものなり。

猶、熊本藩に於ては、地元人民に、御留山保護の任を負はしめ、其の代價として、林内の柴草、落枝のみの採取を許可す。

御林(オハヤシ) (ウー二五)

各藩概ね官營林に對し此の名稱を有す。蓋し官林に對する總稱なるべし。此の他同意義の名稱なる御山、御用山、御林山等あり。(各項参照)

御林下草錢(オハヤシタクサゼニ)

幕府、地頭林の下草を、秣草にせんがため、村方にて刈取る場合差出す、役永である。之は、豫め定納の小物成(このものなり)になるもあり、又其年に依り、菅草生立の様子により、請負て、年に不同あるは、臨時浮役の内に入れる。

御林山(オハヤシヤマ) (ウー三二)

(日本農政史)

御林山とは、藩有山の呼稱にして各藩、概ね藩有山に對し、此の呼稱或は御林又は御山なる呼稱を有す。

「註」會津藩に於ては、古來御林山ありて、藩有に屬し、特別の保護をなし來りたるも、特に松樹の繁殖を圖り、村持山(村有林)にしても、松樹の自然に生じて繁茂し、松林となれば之を取上げ、御林山に編入し、年々検査員を派して調査し、之を保護せり。

生立山(オヒタチャマ) (シー二〇五)

久留米藩にあり、藩用に供する雜木林なり。

御百姓植立山(オヒヤクシヤウウエタヤマ) (シー一七〇)

熊本藩にあり、原野中樹栽に適する個處へ町村人民に於て出願の上、許可を得私費にて杉、扁柏、松等を栽植し、御山根帳に栽植人一己の名受に登載せるものにして、其取扱は里御山に異らず。

御普請山(オフシンヤマ) (カー二五五)

萩藩にて藩の特別なる需要例へば造營等の如きに備ふるため、一切伐木を禁じたる藩有林なり。

大氏(オホウヂ)

我國古代の社會組織は氏族制度にして、即ち血縁の連鎖に依り全人民は先づ若干の大氏に分れ、更に幾多の小氏に岐れ、小氏は又數多の戸に分れたるなり。大氏には氏上ありて之を統理し、氏人に必要なる土地は、凡て大氏が團體として支配權を有し、私人たる諸部曲の民を統率し、農業の他に、各氏に特有なる氏業に従事せしなり。

大山守(オホヤマモリ) (オー四四五)

大山守は、又山横目(やまよこめ)と云ふ。水戸藩等に於て稱する處の山林監督者なり。其の下役には、小山守と云ふあり、總べて藩有林に關する不正事件を彈劾する役にして、訴訟に關する場合多し。

(オの部未了)